

工学部創設 40 周年記念号の発刊にあたって

工学部長 上和田 茂

工学部の創設

本学工学部は、昭和 38 年（1963 年）4 月に機械工学科、電気工学科、工業化学科の 3 学科により発足し、翌昭和 39 年（1964 年）に土木工学科及び建築学科が増設され、5 学科が揃ってから平成 16 年（2004 年）4 月で満 40 歳を迎えることになりました。

入学生数の推移

工学部における学生の入学定員が、現在と同じく 100 名になったのは昭和 51 年（1976 年）のことであり、発足当初の定員はわずか 40 名でした。

当初は志願者数が定員を下回る学科もみられましたが、昭和 41 年（1966 年）には実に定員の 2.5 倍にあたる 504 名が工学部に入学しております。この数値は、本学工学部が短期間のうちにいかに好感をもって高校および高校生に迎えられようになったかを物語っています。

このような好況を背景として、昭和 44 年（1969 年）には定員を 80 名に増員し、その後も入学生数は上昇の一途をたどりました。過去最高の入学生数は 966 名で、昭和 55 年（1980 年）に記録しております。実に定員の 1.9 倍でした。臨時定員増が開始された平成 3 年（1991 年）以後においても最高は 900 名弱ですので、当時いかに多くの学生を受け入れていたか、容易に想像ができます。工学部の名声が広く行き渡るようになった証でもあり、誠に喜ばしいことでありました。

ところで、その直後の昭和 57 年（1982 年）に例の九産大事件が起きました。いわば頂点からどん底に転落したわけです。余りにも多くの入学生を受け入れていたことも事件の背景にあったことを想起すると、少々複雑な思いが脳裏を飛来します。

しかし、その後に払った代償の大きさを考慮してもなお、適正規模による教育がいかに大切なことであるかを思い知ることになったのは、その後の本学及び工学部の方向性を展望する上で大きな財産になったとも考えられます。ところが、その反省にもかかわらず、その後、本学は大幅な臨時定員増に転じ、再び多くの入学生を受け入れることになりました。

量の時代から質の時代へ

このように過去の入学生数の推移をたどることで分かったことは、創立以来、本学はまさに「量の時代」を駆け抜けてきたという事実です。その結果が現在いかなる状況をもたらしているか、ご存知のとおりでもあります。そして、今なお量の呪縛から逃れられず、出口の見えない閉塞感にとらわれているのが現実の姿です。今まさに私たちは大変な曲がり角に立たされていることに気付かされます。今思うと、志願者数が最も多かった時期にこそ、長期的な戦略のもとに本学のレベルを上げる多様な努力や試みを行い、存在価値を高めておくべきでありました。

しかしながら、今からでも遅くはありません。悲観的な要素が多いことは否定しようもありませんが、それでもなお明るい材料がまったくないわけではありません。今からでも質の維持を目指して教育体制と教育手法の大転換を図り、学生にとって学びがいのある教育研究の場を構築することが求められます。

本年度、バイオロボティクス学科が開設され、また従来の工業化学科が物質生命化学科へ、土木工学科が都市基盤デザイン工学科へと名称変更するなど、工学部の教育体制は大幅にリニューアルされました。これ機に工学部の改革のスピードを一段と加速することが期待されるところであります。

学生と教職員の研鑽の場としての研究報告

工学部研究報告は、これまで卒業論文、修士論文及び博士論文などを通して、学生と教職員との絆とたゆまぬ研究努力の結晶により支えられてきました。40 周年の節目にあたり、改めてこの意義を再認識していただき、今後ますますお互いの研鑽の場として活用していただくよう念願しております。

最後になりましたが、工学部創設以来、工学部の発展のために、粉骨砕身、多大なご尽力をいただき参りました教職員の方々にこの場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。状況はますます厳しさを増すことが予想されますが、これまでも増して皆様のご協力をお願い申し上げる次第です。